

- 33-40. 金井弘夫, 1978. 分類学的情報処理のためのデータカード. 北陸の植物 25 (4): 77-82. 金井弘夫, 1979a. 標本データのファイル化. 日本植物分類学会会報 4 (2): 3-6. 金井弘夫, 1979b. 地図および分布図作図プログラム KLIPS2 操作法. 国立科学博物館研究報告 B (植物学) 5(3): 87-96. 金井弘夫, 1981. 日本地名索引 (上, 下). 653+1566 pp. アボック社. 金井弘夫, 1983. 長野県フロラ作成資料の電算機処理. 長野県植物研究会誌 (16): 1-7. 金井弘夫, 1984. 日本植物の分布型の研究 (4) 分布データと環境情報地図の対比. 植物研究雑誌 59: 247-255.

○シロシダレヤナギについて (木村有香) Arika KIMURA: De *Salix lasiogyne* Seemenii commentariolum

日本のヤナギの中には古くから学名はあってもその正体の明らかでないものがまだ若干ある。わがシロシダレヤナギ *Salix lasiogyne* Seemen もその一つで、これは 1903 年 Otto von Seemen が彼の *Salices Japonicae* で発表したものである。引用された標本は Urban Faurie の no. 3702 ♀ と no. 632 ♀ である。1916 年 C.K. Schneider は *Plantae Wilsonianae* 3: 111 で前者を type, ♀, ex Seemen とし、後者を co-type, ex Seemen としている。私は後述のように、両者の花を解剖したことがあるが、この二つは各々別の分類群に属する。現に Schneider (l.c.) は後者 no. 632 は *Salix koreensis* Andersson ではないかと記している。前者 no. 3702 は 1899 年 5 月 8 日 (Seemen は 2 日と記す) Faurie が相州山北で採集したもので、上記 *Salices Japonicae* の Tafel 4 の図 A-C とは苞の先端の形 (下記参照) を除きよく合致するが、後者 no. 632 は花柱の長さや柱頭の形や大きさに於て全く一致しない。それ故 no. 3702 を *Lectotypus* として話を進めて行きたい。

さてこのヤナギにつき Seemen は花穂は下垂 (hängend) と書いているが、これは枝がしだれているのに気付かなかったことによる誤認である。花穂はしだれた枝から彎曲斜上しているのであって、このことにつき筆者は大学院学生の時に小泉源一先生から御教示を受けたことがある。更に幸いにも筆者は先生の御好意により、先生が留学中パリの自然誌博物館から貰われた Faurie no. 3702 の花穂を、1935 年 2 月 13 日 京都大学 (KYO) で解剖し、花のスケッチを作ることができた。すなわち苞は単一色で狭い卵状長楕円形、上部は多くは鋭形であるが先端そのものは鈍頭あるいは凹頭、外面は下部と縁辺に疎長毛があるが内面の毛はごく疎。長さ 1.6-1.8 mm, 幅 0.6-0.8 mm。Seemen は苞の先端が鋭尖に近いほど尖った図を描いているが、そんなものは筆者は遂に見出し得なかった。icon mala と言いたい。腹腺体は卵円、長さ約 0.3 mm。子房は狭卵形で上端鈍形、下半に疎長毛あり無柄。胚珠は各胎座に 2 個。花柱は短く 0.2 mm, 柱頭は左右にひらき長さ 0.3 mm, 先端円状截形往々僅かに凹頭。また京都大学 (KYO) にあ

る Faurie の no. 3702 (Isolectotypus) では上部中間葉は披針形で先端鋭尖, 基部鋭形, 両面に長い絹毛を布く。これらの所見から, このヤナギはシロヤナギ節 sect. *Subalbae* Koidzumi に属すること極めて明瞭である。筆者はこのことを念頭に置き多年 *Salix lasiogyne* の探索をつづけてきた。その結果それと覚しい野生のものに山北附近, 富士山麓, 松本市附近, 下田市附近等で少数ではあるが時々出会った。いずれもシダレヤナギ *Salix babylonica* L. に似てはいるが, 枝は短く, 傾下または半しだれであった。♀花は大体 Faurie の no. 3702 に一致した。そしてこのようなヤナギの出現はいつも人里近い所に限られ, 且つコゴメヤナギ *Salix serissaefolia* Kimura の分布区域内であった。その枝ぶり, 花や葉の形質を合わせ考えるとシダレヤナギとコゴメヤナギとの中間型と言いたくなる。こんな次第で遂に *Salix lasiogyne* はこれら両種の自然雑種であろうとの考えに到達した。これらは多くは単純な F₁ であろうが, また戻し交雑により両種の形質がいろいろな組合せとなってできた個体もあるかと思う。1979年経験豊かな 靱山泰一, 長谷川義人両氏は鎌倉市のシロシダレヤナギと考えられる大木 6 株から, 花と中間葉と成葉の標本をそれぞれ同一株から採り揃えて筆者に提供された。forma *lasiogyne* かどうか未決定であるが, これは実に絶大な後援であって全く感謝にたえない。また岐阜県立大学の水野瑞夫氏と摂南大学薬学部 的田裕子氏は美濃・飛騨のシロシダレヤナギの各時期の標本を同一株から採り揃えて提供して下さるといふ。筆者はそれらを精研の上, 更に現地で枝ぶりを確かめ, 改めて本誌で詳細な報告をしたいと希っている。なお上記 Faurie no. 632 ♀ (Seoul 産) の花を, これも小泉先生の御好意によって解剖したが, これは *Salix pseudo-lasiogyne* Léveillé と見た。今の所シロシダレヤナギはコゴメヤナギの分布区域以外からは見つかっていない。この辺の事情は東北地方の人里近い所にしばしば現われるシダレヤナギとシロヤナギ *Salix jessoensis* Seemen との中間型の場合と全く同様である。拙文を書くに当り原寛, 大橋広好両博士は有益な助言を寄せられた。深く感謝の意を表したい。

Salix × lasiogyne Seemen, *Salic. Jap.* 32, t. 4, f. A-C (1903) pro sp., excl. specim. ex Korea—Koidzumi in *Bot. Mag. Tokyo* 27: 265 (1913)—C. K. Schneider in *Sargent, Pl. Wilson.* 3: 111 (1916) quoad specim. ex Yamakita.

Salix babylonica L. × *S. serissaefolia* Kimura ex Hirohito, *Fl. Suzaki.* 73 (1980).

Habitu et ceteris notis inter *Salicem babylonicam* et *S. serissaefoliam* ambigit et verisimiliter ex iis hybriditate orta. Notabile est hanc *Salicem* semper intra fines *S. serissaefoliae* occurrere, praesertim ad pagos et circa domos, ubi saepe colitur *S. babylonica*.

Examinavi fragmenta amenti ex lectotypo (Faurie no. 3702 ♀).

(仙台市 [redacted])